

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2024 年度
氏名	加藤 聖美	指導教員 (主査)	高橋 稔 教授

論文題目	障害のある就労者においてソーシャルサポートが自己成長主導性を介してワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響
------	--

本文概要
【問題と目的】民間企業における障害者雇用は拡大しているものの、定着率の低さ等の課題が残されている（厚生労働省，2024）。現在は職場のメンタルヘルス不調を未然に防ぐことや，個人の強みに注目した動きが増加し，新たにワーク・エンゲイジメント（以下，WE）という概念が提唱された（島津，2022）。WE は活力，熱意，没頭によって特徴づけられる，仕事に関連するポジティブで充実した心理状態であり（島津，2022），WE を高めることは障害者のメンタルヘルス向上に寄与すると考えられる。天池（2019）は，健常者を対象に職場サポートが自己の成長を介して WE に正の影響を及ぼすことを明らかにした。本研究では，天池（2019）にならい，障害のある就労者において SS が自己成長主導性を介して WE に及ぼす影響を検討することを目的とする。具体的には「障害のある就労者において，4 種類の SS が WE に正の影響を及ぼす（仮説 1）」点，「障害のある就労者において，自己成長主導性は WE に正の影響を及ぼす（仮説 2）」点，「仮説 1 のパスにおいて自己成長主導性が媒介する（仮説 3）」点について検討した。なお，本研究では，障害者全体のモデルで検討した後に障害種別ごとについても検討した。 【方法】Web 調査会社 A 社のモニターのうち，年齢が 15 歳—65 歳の 6,000 名を対象にスクリーニング調査を実施し，障害者手帳の有無，種類，等級（任意回答），障害名（任意回答）について尋ねた。現時点で正社員や契約・派遣社員，公務員のいずれかに従事している障害者手帳保有の就労者 200 名（男性 158 名，女性 42 名，$M=43.11$ 歳，$SD=10.14$ 歳，身体障害者 88 名，知的障害者 53 名，精神・発達障害者 59 名）を分析対象とした。質問紙の内容は以下の通りである。①Utrecht Work Engagement Scale

Shimazu et al. (2008) ②ソーシャルサポート尺度 (片受・庄司, 2003) ③自己成長主導性尺度 (徳吉・岩崎, 2014) ④フェイスシート (勤続年数, 職種)

【結果と考察】 仮説 1 の検証のため, SS を独立変数, WE を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果, 障害者全体のモデル, 身体障害者のモデルで情緒的 SS が WE に及ぼす有意な影響が確認された。また, 知的障害者, 精神・発達障害者のモデルで情緒的 SS が WE に及ぼす有意傾向が確認され, 仮説 1 は一部支持された。この結果は, Bellou et al. (2024) が示している障害のある就労者における情緒的 SS の重要性を支持する結果となった。仮説 2 の検証のため, 自己成長主導性を独立変数, WE を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果, 障害者全体のモデルで積極的な行動, 計画性が WE に及ぼす影響は有意であり, 精神・発達障害者のモデルで積極的な行動が WE に及ぼす影響は有意であった。以上から, 仮説 2 は一部支持された。しかし, 精神障害と発達障害にはそれぞれ固有の特性があり, 本研究では考慮していない異なった背景要因や調整要因の影響を受けている可能性があるため, 今後は両者を区別した上でより詳細に検討する必要がある。仮説 3 の検証のため, 精神・発達障害者のモデルで独立変数を情緒的 SS, 媒介変数を積極的な行動, 従属変数を WE としたモデルでパス解析を実施したところ, 完全媒介する可能性が示唆された。よって, 仮説 3 は支持された。以上, 本研究では天池 (2019) のモデルを採用し, 健常者対象の既存研究が障害者にも適用可能かを検討した。その結果, 障害のある就労者においても WE の個人資源に自己成長が存在することを明らかにした。さらに, 障害のある就労者における情緒的 SS の重要性を示した点に意義があると考ええる。